

米欧亜回覧

第80号

発行

特定非営利活動法人

米欧亜回覧の会

編集委員会

保阪正康氏講演

「現代的課題を大正時代の歴史から考える」

秋の全体例会は十一月二五日開催

秋の全体例会は十一月十五日、一ツ橋の学術総合センターで開催される。

十三時三十分より
会務報告他

十四時三十分より

保阪正康氏の講演

講演内容は、戦後七十年というところで、このところ昭和史がクローズアップされていたが、今回はその前の大正時代まで遡り、平和・デモクラシー・生活の視点も含めて考察し、現代的課題を考えるヒントにしようという極めて興味ある内容です。どうぞ、ふるってご参加



7月全体例会
(7月26日学術総合センター)

ください。貴重な機会です、友人、知人などお誘い下されば幸いです。

なお、講演後に懇親会を予定しており、保阪先生も参加くださることになっています。

芳賀徹先生の講演

「岩倉使節団と米欧回覧実記」

七月の全体例会

今回の講演は、来年の記念事業に向けて特別顧問を引き受けてくださった芳賀先生から、「米欧回覧実記」及び「岩倉使節団」の評価についての貴重なお話や当会設立以前からの三十年に及ぶお付き合いの歴史についてのお話となった。それは、先生が院生時代、古本屋で「米欧回覧実記」と巡り会ったことから始まり、当会へのたびたびのご出講、そして設立五周年記念シンポジウムや十周年記念シンポジウムのコーディネートをしていただいたことなど、芳賀先生ならではの貴重なお話となった。

(詳細は二頁)

二十周年記念事業の大枠決まる

ランドシンポジウムは二〇一六年二月二、三、四日

場所は一ツ橋学術総合センター

幹事会を中心にかねてより検討中であった記念行事企画の大枠が決まった。

この企画は三段階から構成されており、最終段階としてメインのランドシンポジウムを三日間にわたって開催する。そして、本企画の特色は、その前段階として本セミナーを各部門別に六カ月余行い、さらにその予備段階としてプレセミナーを会員間で部門別に行うことである。

プレセミナーはA、B、Cと分かれ、セミナーAは歴史部会担当により、「岩倉使節団の群像」明治国家に何をもちたらしめたか」を、セミナーBは近代史研究会担当により、「日本近代の成功と失敗」百五十年の歴史を群像で探る」を、セミナーCはグローバルジャパン研究会担当で、「地球時代の新しい日本像を描く」和の精神で世界のモデル国を目指す」をテーマにすすめる。いわばステップ、ホップ、ジャンプの三段方式で行うことになり、プレセミナーは、すでに雁行形態で始動している。

(詳細は三・四頁)

このところ、二十周年の記念行事に関連した歴史セミナーが増えて、毎週のようにならぬと人物が取りあげられデスカッションも熱気を帯びてきている。「岩倉使節団の群像」シリーズと「日本近代の群像」シリーズがダブルで同時進行しているからである。

大久保・伊藤・原の暗殺がなければ… —敢えて「イフの歴史」を問う

泉 三郎

すでに、横井小楠、井上毅を皮切りに大久保利通、原敬にいたるまで、十八人の発表があり、明治から大正にかけての歴史が人物像を通じて生き生きと蘇ってくる感じである。そして、それを聴いていて痛感することは、「あの人がもう十年も生きていてくれたら」という思いであり、「もう一つの日本があったのではないか」という思いにつながる。歴史にイフは禁物」は定説だが、私は敢えて「イフの歴史」を想定することも極めて重要であり、歴史から教訓を引き出す上で有意義であると思う。

り、わが日本近代史の重要な分岐点でテロという不条理な事件が歴史を変えてしまったことにやりきれない思いを抱かざるを得ない。中でも特筆すべきは大久保利通、伊藤博文、原敬の三人である。申すまでもなく大久保は幕府を倒し維新政府を創り上げ「米欧回覧」の成果を基に、近代日本の路線をしっかりと固めた大宰相だった。伊藤は大久保の遺志を継いで近代的な「憲法」をつくり「議會政治」への道をつけた「明治国家の形成者」だった。そして原敬はその遺志を継いで「国際協調」と「議會政治」の実現に邁進努力した平民宰相だった。真の政治家の要件を考えると、この三人の履歴、思想、事跡を学ぶことは極めて有益である。とくに人間形成期に不遇・辛酸な体験をしており、その艱難辛苦のなかで鍛え上げられていることの重要性を思う。

現在、これらセミナーはまだ途上にあり、これから続々と重要人物が俎上にあがるのだが、現時点でもすでに大いに学ぶことがあ

会員有志の発表は来春三月まで続く。扱う人物は政治家だけでなく実業家、思想家、文学者など広範囲に及ぶ。興味ある会員はぜひ参加してほしい。

第76回 全体例会

七月全体例会 芳賀徹氏講演

「岩倉使節団」と「米欧回覧実記」について

七月全体例会が、七月二十六日、一ツ橋の学術総合センター会議室で開催された。

会務報告は、泉三郎代表の挨拶に続いて、「実記を読む会」、「英訳実記を読む会(サトウ輪読会)」、「歴史部会」、「グローバルジャパン研究会」、「広報・メディア委員会」、「i-cafe」、そして、「難波康熙幹事による「関西支部」報告があった。また、泉代表による二十周年記念事業に向けて進行しているプロジェクトA・B・Cおよびヴァーチャルミュージアム構想の紹介があり、各プロジェクトの担当委員による経過報告が行われた。



右) 芳賀徹氏(泉代表と当会との関りを振り返りながら)

講演要旨

米欧亜回覧の会とは最初のころから関わっていた。会合に何回か参加し、国際シンポジウムにも二回参加しお話をした。新年会が楽しそうであつたが、二年ほど前に病気を患って参加出来なかつた。

「特命全権大使米欧回覧実記」には縁が深く、一九五八年フランスから帰ってきた次の年、本郷の古書店にあつた。三千円だったが、自分が旅したところがたくさん出ていて面白そうだと買った。二年くらいたつて、島田謹二先生が辞める時、記念論文集をだそうとなつて、この本を取り上げることにした。漢文の読み下し文、なかなかとつつきにくいがある程度ついていけるようになる、とたんに面白くなる。自分の経験と照らし合わせる、とほかに研究、調査が進んでいて、観察もあれやこれやと詳しい、そして当時の日本と比べてどうだと書いてある。

文明的研究とは違う紀行文としても面白いので初めての論文、『明治一知識人の西欧体験—久米邦武の「特命全

権大使米欧回覧実記』を八十枚枚くらい書いた。とつても評判が良かった。

岩倉使節団は、廢藩置県をやつて直ぐに新政府の要人が、当時もつとも優秀な各省庁の次官以下を引き連れて五十人、アメリカとヨーロッパを調査して見事な報告書を書いた。

久米邦武という人が特別秘書官といふかたちで、使節団の見た全てを記録し分析し調べなおして書いた。このことも全く知らなかつた。当時は参考文献を探しても一冊もなかつた。歴史家は読んでいなく、『実記』は外交史の上で何も役に立たない本とされていた。国文系の学者は島崎藤村、二葉亭四迷、坪内逍遙、北川透谷が文学と考へ、福沢諭吉は文学ではないとの考へで、まして『実記』などは聞いたこともないという状況だった。しかし、泉さんや会の皆さんのような活動に引き継がれ、いろいろと研究が進んでいるのは、とてもうれし。今でも未だいい研究題材が残っている。

NHK教育(現Eテレ)の一九九〇年一月〜三月、四十分のプログラム十二回の最後で泉さんと対談して、米欧研究の意義と文章の素晴らしさを強調した。私にとつてどこをしゃぶつても美味しい歴

史的事象であり、明治文学史上誠に注目すべき金字塔である。

どうしてこれほどの教養をもつて、漢学でござりに固まっているのではなく、外に開かれた好奇心満々の精神をもつて、初めて知るアメリカ、西洋諸国の文明をこれだけつっこんで研究し、しかもそれをつかんで要約して表現することができたか、その力はいったいどこからきたのかを是非明らかにして頂ければと思います。

一番先に書いた「明治一知識人の西洋体験」を読み直して、佐賀藩は当時、幕府と匹敵するぐらいすんだ、先進的な西洋技術およびその応用研究センターであることに気が付いた。そのなかから久米邦武がでてきた、副島、佐野、大隈がでてきた。佐野常民は最高級のテクノクラート。幕末まで蓄積された手持ちの技術を新しいシステムの中に編成しなおした。久米邦武は漢学者のはずなのに理系も強い、アメリカや西洋をみなこなして自分のものにして文章に表現している。久米邦武の背後にある、佐賀藩といふエリート藩を研究してほしい。

『実記』は、幕末までの徳川武士が抱いていた最高の教養を集約して、それを新しい最

二〇一六年・新年・パーティは一月九日(土) 外国人記者クラブで!

ノーベル平和賞受賞者を撮りつづける写真家、薄井大還氏や、ロンドンを拠点に活躍する新鋭のチェリスト伊藤悠貴氏を迎えて「平和への祈り」をテーマに素晴らしい映像と音楽の企画がすすんでいます。どうぞご期待ください。



伊藤悠貴氏

先端文明を現状にむけて要約した。東西文明のもつともいものが火花を散らしてぶつかった。現代日本を考えるうえで最も重要な近代史の問題であることを心得て研究してほしい。日本に蓄積された光を背負って世界を照らしてきた彼らを動かしたエネルギーは何か、その背後にはどのような歴史があるか。

岩倉使節団を生み出した原動力としての徳川の日本文明、そちらの方にも探りを入れていただきたい。そのことは国際シンポジウムでも話した気がする。「岩倉使節団の比較文化的研究」(思文閣出版 2003)にも書いたので見てほしい。

二十周年記念行事の大枠決まる

グラントシンポジウムは二〇一六年十二月二、三、四日場所は一橋学術総合センター及び如水会館

幹事会を中心にかねて検討中であった記念行事企画の大枠が決まり、実行委員会も立ち上がり、この方針にそって各種の活動が始動した。以下はその概略である。

〔テーマ〕

岩倉使節団の世界史的意義と地球時代における日本の未来像―明治創業世代の志を体して

- 第一日：岩倉使節団の群像―その「光と影」から学ぶ
第二日：日本近代百五十年―その成功と失敗から学ぶ
第三日：地球時代の日本の未来像―そのヴィジョンを考える

〔組織〕

- 総括責任者 泉三郎
事務局長 近藤義彦
実行委員長 塚本弘
副委員長 岩崎洋三
委員 小野博正、山田哲司、島山朔男、吉原重和、小松優香

〔スケジュール〕

このグラントシンポジウムは、二〇一六年十二月の三日間だけでなく、その前段階とし

て、専門家を交えた本セミナーシリーズを行い、その集大成として開催することになった。

また、その準備段階として会員による勉強会を行うことにし、すでに三つのグルに分かれ左記のようなプレセミナーを始めている。

セミナーA：歴史部会

岩倉使節団の群像と光と影
担当幹事：小野博正

現在すでに井上毅、長与専齋、大久保利通の順で進められ、田中不二磨とつづく。

セミナーB：近代史研究会

日本近代百五十年の成功と失敗と人物像で探る
担当幹事：山田哲司

明治編は、伊藤博文、岩倉具視、山縣有朋などの十人がすでに終わり、現在は、大正及び昭和前期へと入っている。

セミナーC：グローバルジャパン研究会

日本の未来像を探る
担当幹事：島山朔男

第一回を十月十七日、第一テーマである「平和・安全保障」について開催し、第二回は十一月二十九日に第二テーマである「幸福」について行う予定。プロジェクトA・M（アーカイブ&ミュージアムチーム）

担当幹事：吉原重和

バーチャルミュージアムの構想を企画し、その準備段階としてHPの充実、アーカイブの

整備に着手している。また、コンテンツとしてはすでに各種のものが蓄積されつつあるが、「岩倉使節団の群像の小伝シリーズ」が小野博正氏の尽力で着々と進行している。使節団本隊、各省理事官随員、随行留学生、海外で逢った外国人・日本人、留守政府の群像など、草稿は優に百五十名を超えており、岩倉使節団と関連人物像の全貌が立体的に明らかになりつつある。

セミナーBグループは「近代史研究会」へ、経緯と今後

二十周年記念事業のうち、Bグループは「日本近代の百五十年の成功と失敗から学ぶ」とのテーマで、日本の近代史をその時代・時代における主要な人物を選び、その人物を通して時代の理解を深め、その失敗と成功の歴史を探るセミナーを企画・実施することを目的として発足した。

このグループの当初の委員は、泉三郎、井出亜夫、小松優香、半澤健市、持田鋼一郎、森本淳之、山田哲司の七名で、本年一月以降四月までに六回の会合を開催、主要な人物として誰を選ぶかを、数十名の歴史上の人物の中から、明治・大正・昭和の時代の流れに沿いながら検討した。その結果、明治編には横井小楠、岩倉具視、伊藤博文、福沢諭吉、夏目漱石、山縣有朋、岡倉天心、岩崎家四代、

渋沢栄一、中江兆民の十名を選び、この七名のメンバーによるセミナー形式の報告会を実施することにし、五月以降、一般の会員にも参加を呼びかけ十回開催、八月に終了している。

また九月以降も引き続き、大正・昭和前期編として、西園寺公望、原敬、吉野作造、与謝野晶子の報告を終了、今後は、当初の七名の委員以外の会員の参加も得て、大正・昭和前期史概観（仮題）、柳宗悦、小林一三、山川均（仮題）、島崎藤村、高橋是清、他、実業家、政治家などのテーマで実施することとしている。

このセミナーは、来年四月以降に予定している本セミナーをどのように運営して行くかを定める、いわば会員による準備セミナーとの位置づけであり、本セミナーでの外部講師を誰に依頼するか、テーマをいかに設定するか、本セミナーにおける会員のかかわり方をどうするか、などを決めていくことが今後の課題となる。

なお、Bグループのセミナー活動は、他の部会による研究会との区別が不明確で分かりにくいとの意見もあるので、このたびBグループを「近代史研究会」と称することとした。また、このセミナーの日程は事務局よりメールにて予告されているので、会員はどなたでも自由に参加してください。セミナー

は約一時間が人物及び時代背景についての報告、後半約二時間は報告をベースにした討論である。テーマについては、事前に決まっております、ご留意ください。

（文責） 山田 哲司

グローバルジャパン研究会再開後の回顧と、今後の進め方について

「七月十一日」十七名が参加して、これまでの回顧と今後の進め方について話し合いが行われた。

本会は「現未来部会」から引継ぐ形で名称も「グローバル・ジャパン研究会」に改め出された。諸般の事情で一時休会状態であったものが泉理事長の肝いりで平成二十五年八月、新たに再出発した。

以来、二年間に取り上げられたテーマは左記の通り。

- 『日本をどんな国にしていきたいか』 「科学」 「環境」 「エネルギー」 「教育」 「税・財政」 「医療」 「女性」 「宗教」 「政治・歴史認識」 「安保問題」 等々。

このように多岐に亘り幅広く討議され、毎回プレゼンターと参加者間では熱心な質疑応答や時には熱い討論がさされてきた。

折も折「米欧亜回覧の会二十周年記念・グラントシンポジウム」について幹事会にて

企画・計画案の話し合がなされ、当グローバル・ジャパン研究会もセミナー(C)として参加すべきとの声挙り、その流れに合流することになった。そして、アドバイザの吹田尚一氏から新企画についての『叩き台』として下記の提案がなされた。

＊日本はこの危局を乗り越えられるか(実体経済社会について)

＊先行き経済社会運営に不安はないか(財政赤字)

＊未踏社会の下で改革・再生・活性化の新方途を探る

＊日本の国家安全保障について

＊日本国家の明るい未来の姿は？(国家の健全性・先進性を描き出す)

国内・世界を問わず様々な問題、特に軍事・外交・教育・コミュニティ・基地問題・環境、社会インフラの整備、等幅広く提案が出されたが、当日、絞り込むまでには至らず、ついで、小野博正氏より提案があり夏休みの間に会員が自分が推挙するテーマについて、具体的に意見や提言を添えて八月末までに事務局に書面で提出してもらう事になった。

「九月十二日」十四名が参加し、十七名から寄せられた『宿題』の整理とテーマの絞り込みなど本会の進むべき方向性について熱心な討議が行われた。そして、一人ひとり自分の掲げたテーマや提言について説明し、その提言に対する質疑や討論が行われた。討議のプロセスは省略するが、こうした経緯をへて最終的にテーマや論点は来年実施予定のグランドシンポジウムのテーマとの整合性も考え、(仮)ではあるが左記に決定した。

「基本テーマ」
地球時代の『新しい日本像』を描くー和の精神で世界のモデル国を目指すー

(一) 世界の平和を目指すー「九条」を活かし世界から戦争をなくす

論点・平和とは？ 安全保障の仕組み、国際交流・相互援助のありかた、国際紛争の解決法(国連改革案)、日本の立ち位置と世界の中の役割

(二) 民の幸福を目指すー万民がよく生きられる条件をつくる

論点・幸福とは？ 仕事・家庭・貧困・格差・コミュニティ・教育・医療など「少・青・壮・老」という「人生の四季」にふさわしい幸福・生き甲斐。

(三) 日本列島の美的改造を目指すー自然と歴史が織りなす世界のモデル国へー

論点・地方創生、行財政改革(千兆円問題)、文化伝統

の維持、継承、景観・環境美化、「珠玉の日本列島へ」まるごと世界遺産をめざす。

そして、来春からは、その道の専門家も招いた本セミナーとしてスタート出来ればと希望している。

(文責) 畠山 朔男

好評のT-Cafe@シェア奥沢
九月は「英国編」

Part IIとなった、映像と音楽で巡る「岩倉使節団の米欧回覧」は相変わらず好評で、毎月のように開催されている。

シェア奥沢では七月十九日、「アメリカ篇II(ワシントン滞在と東部回覧)」に続き、九月二十日、今回が九回目となる「英国編」が開催された。その間の八月二日には、在アンゴラ日本国大使の伊藤邦明氏が講師となった、お話と映像の会「へえ、アンゴラってこんなところだったんだ！〜現地テレビで見る生活

の維持、継承、景観・環境美化、「珠玉の日本列島へ」まるごと世界遺産をめざす。

そして、来春からは、その道の専門家も招いた本セミナーとしてスタート出来ればと希望している。

(文責) 畠山 朔男

好評のT-Cafe@シェア奥沢
九月は「英国編」

Part IIとなった、映像と音楽で巡る「岩倉使節団の米欧回覧」は相変わらず好評で、毎月のように開催されている。



吉原氏(9月20日)
「薩摩藩密航英国留学生」



揃いのTシャツでコーラス
(胸には i-café Singersの文字)

実態」も行われ、いずれも多くの方が参加された。

九月二十日の英国編は、第一部の映像とお話としては、DVD「岩倉使節団の米欧回覧」の第四章「最盛期の大英帝国を行く」と、第五章「英国の光と影」を見た後、原文朗読を挟んで、会員の吉原重和氏に「薩摩藩密航英国留学生」と題してお話しいただいた。留学生の一員で初代日銀総裁にもなった吉原重俊の子孫である吉原氏のパワーポイント映像を駆使したお話しは説得力があった。

第二部のミニ・コンサートは、T-Cafeお馴染みのソプラノの武藤弘子さんが植木園子さんのピアノ伴奏で、ヘンデルの「泣かせたまえ」英国民謡「埴生の宿」、「アニー・ローリー」、「故郷の空」で美声をご披露いただいた。続いて、会員による男声カルテットT-Cafe Quartetが揃いのTシャツで初登場し、一ダ

ニー・ボーイ」、「スカーパーロ・フェア」を披露した。ただ、「工事中」の出来だったが、Tr.畠山、Tr.岩崎、Br.吉原、Bs.西川の一同四人は「他日を期そう」と意気盛ん。

第三部の懇親会は、キッチン・マスターによる英国にちなんだ軽食とワインで、和やかに余韻を楽しんだ。

(文責) 岩崎 洋三

☆新会員自己紹介☆

新たに会員となった方の自己紹介です。

野島 忠幸

会社の先輩から「岩倉使節団」で、知ってる？と聞かれ、「ああ知ってますよ、条約改定交渉に行つて失敗した使節団でしょ」と答えた私でしたが、約百名に及ぶ使節団員が帰国後、近代日本に及ぼした事々を聞かされ、『米欧亜回覧実記』読み始めました。読み進むに従い、私は、明治維新以後、近・現代の日本の歴史を出来事の羅列として学んだものの、底の浅い知識でしかなかったと気づき、入会させていただく事にしました。

佐藤 かつり

私は現在、働きながら大学の通信教育課程で史学を学んでいます。特に日本近代史が好きで、岩倉使節団については昔から興味があり、独自に

少しずつ調べてきました。大学の卒業論文でも、岩倉使節団の一員だった村田新八の洋行中の活動をテーマにする予定です。まだまだ若輩者のため、入会によって知識を深められればと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

村井智恵

元々明治維新に関心がありましたが、長くアメリカ、シカゴに住んでいます。現在のようにネットが発達する以前、日本語の本が容易には手に入らない！という理由で、英語で書かれた明治維新期の本を読み出し、ネットでもどんどん情報が増えてたので深入りました。明治維新前後にアメリカにいた日本人、日本にいたアメリカ人、アメリカ滞在時期間中の岩倉使節に特に関心を持っています。

根岸謙

私は現在、東北大学大学院にて民法の研究を行っております。

わが国の民法は、岩倉使節団が派遣されたのと同様の理由から制定が急がれ、明治三年から編纂作業が始まりました。当時の論文を読んでいますと、著述した研究者の、ある種狂気のような気迫に圧倒され、百年以上経った現在においても学ぶことが山のようにあります。

本会会員の西脇美都絵様からご活動内容を伺い、自身の研究にとって大変有意義だと思ひ、さっそく入会させて頂きました。

鈴木正人

泉先生の米欧亜回覧実記の講義を受け鎖国の世から海外に出て、先進国の政治、文化、技術等を学んだ「岩倉使節団」を知り、この時代に日本を先進国に持つていく人達の生い立ち、考え方、思いに興味を持ち入会しました。

明治を作った人達を知ること、今後の自分の生きざまに少しでもプラスになり、世のため、人のために尽くせれば幸いと考えています。時間の許す限り出席したいと思ひます。よろしくお願いいたします。

実記を読む会報告

担当幹事 小坂田 國雄

Tel&Fax 044-987-1531

osakadakunio5256@icom.home.ne.jp



■第百九十五回

七月九日開催、参加八名。

第五編巻第5巻

紅海航程ノ記、

第5巻阿刺伯海

航程ノ記

一八七三年七

月二十七日、快晴の中スエズに到着した。ポトサイドからスエズまで船が航

行けるようになったのは、僅か四年前のことであった。

久米は第九十五巻でスエズ運河をつくり上げたフランス人レセップスについて、多くの頁を使い功績を讃えている。全巻を通して、個人に心酔しているような例は他にない。十八世紀にフランスのナポレオン一世が征服した時、運河を造ることの企てがあった。英国によるフランス軍追放により、工事が頓挫したが、エジプトの副王アリーは、運河工事をあきらめず、アリーの死後、新しい副王サ

イドがフランスの学者や旧知のレセップスの協力を得ることとなったと述べている。レセップスは、一八三三年アレキサンドリア副領事として赴任する途中、船内でコレラが発生し、上陸禁止に出食わし、船中でフランス人ル・ペールがナポレオン宛に書いた報告書「二つの海をつなぐ運河」を読みスエズ運河建設の夢を抱いた。

その後一八四九年マドリッド公使として在任したが、イタリヤ独立運動に関与したため、辞職を余儀なくされた。五年間の隠遁生活後、かつての教え子エジプトのサイドパシャが副王に即位したこと

から、二人は運河開発実現に傾注した。しかしオスマン帝国や英国の利益が複雑に絡み多くの反対がある中、精力的に説得し、一八五四年スエズ

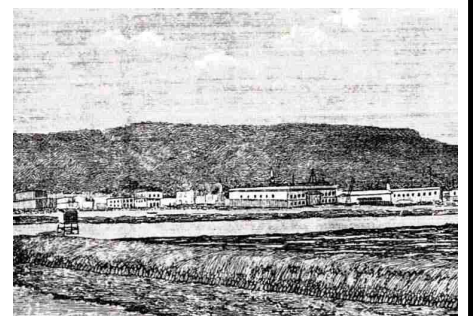
運河会社を設立し、最後はナポレオン三世の仲裁によって工事が進められ、一八六九年ナポレオンの妻ウジェーヌが臨席する開通式が華々しく挙げられた。

尚、久米の記述にはないが、レセップスはその後パナマ運河の開発を始めた。この開発は資金調達、技術的困難、疫病との闘い、反ユダヤ抗争、汚職の冤罪に巻き込まれ、失意と精神異常により、一八九四年に他界している。

このパナマ運河工事には、一九〇四年〜一九一一年の七年間、日本人土木技師青山士(あきら)が従事していた。青山は太平洋戦争中、日本海軍からパナマ運河の爆破の計画、協力を求められたが、「運河の造り方は知っていないが、破壊の方法は知らない」と海軍からの協力を断ったというエピソードが残されている。

その青山は一九六三年三月八十四才で没している。エジプト文明の歴史や、使節団が知らなかったフランス人のシャンポリオンによるカルトウーシュ(絵文字)の解読成功や、ナイル川上流に存在したアブシンベル神殿等の今昔についても紹介し、シナイ山と十戒、紅海の状況、モーセの出エジプト記の真偽

についても説明した。使節団は、アラビア海を経



スエズ運河 (『実記』)

てボンベイに到着している。ボンベイはポルトガルが港として利用していたが、一六六一年ポルトガルのカタリナ王女がイギリスのチャールズ二世と結婚する時、持参金としてイギリス側に委譲し、以後イギリスの植民地となったことなど、『実記』に述べられていないことを紹介した。

■第百九十六回

九月十日開催。第5巻錫蘭島の記

一年半に及んだ欧米視察を終えた使節団一行は、一八七三年七月二十日フランスのマルセイユ港から帰国するが、地中海・スエズ運河を経て、八月九日にセイロン島ゴール港に到着し、次の寄港地シンガポールに向かう十二日まで同地に滞在して仏教寺院等を見学した。赤野禿山を見慣れた一行目にはモンズン地帯



ガルのホテル

(「写真・絵図で甦る堂々たる日本人」)

の緑が眩しく、日本を思い出したように「欧州より来たりてこの景象を見れば、真に人間界の極楽を覚うが如し」と感激している。

到着したゴール港には、ポルトガルが一五〇五年に築いた要塞が残っていた。それが一六五八年にはオランダに取って代わられ、「一七九五年の乱にて外国に力もちいるいとまなく・・・英人は因つて兵を勞せずして、この地を取り」と百五十年毎に支配者が交代したセイロンの困難な歴史を振り返っている。

「この島に今四種の民あり、中に於いて「シンカレイ(シンハリ)」「人種を主とす」と人種構成に言及しているが、紀元前五四世(仏教布教に努めたアシヨーカー王の時代)に北部インドから移住したシンハリ人と、その後五分の一し

かないインド南部から来たタミール人の確執は、今も激しい。英国植民地時代に分割統治目的からタミールが優遇されたが、独立後「シンハリ・オンリー政策」に逆転したためだ。

「珈琲は此島の重なる産物にて欧州に輸入(出)する高、価千三百万弗に及ぶ」とあるが、大規模な紅茶プランテーションが開発されたのは、コーヒーの木が一八七〇年に伝染病で全滅した以降のことだった。なお、この時代プランテーション労働者として八十四万人ものタミール人が移住していた。

(岩崎 洋三)

■第百九十七回

十月八日開催。第88章ベンガル湾の旅

いよいよ回覧の最終局面、ベンガル湾からセイロン、スマトラ、シンガポールへ。セイロンでは「この如き地形は世界に比類なし」とアジアへ帰ってきた安堵感を表している。インドの首都カルカッタを語るに、アヘン貿易が「支那の精神を麻痺させ英国が不祥の利益を得ている」ことを「文明の本意ならんや」と嘆いている。

またスペイン・ポルトガルに始まりオランダそして英国へと覇を競う「弱の肉は強の食」欧州人の遠航の歴史と、

そこへやつてきた「紅毛は文明の民とも思えず、本国より捨てられた民なり」と断罪している。

次に我が国の有識者のアジア観、アジア政策の変遷を鳥瞰した。島津斉彬、吉田松陰に始まり東条内閣をピークとするアジア攻略・資源化論と、横井小楠・勝海舟さらには石橋湛山らのアジア連携論の流れと交錯をみんな議論した。森有礼が李鴻章にはいた暴言(?)「条約締結当事者が退場したら、その条約は無効」「万国公法は無用、国家は強さで決まる」や、昭和十八年の御前会議「マライ・スマトラ・ジャワ・ボルネオ・セレベスは帝国領土と決定」し、都合のいいメンバーで「大東亜会議」を開くなど、日本の夜郎自大ぶりを知ることができた。

最後に視野を広く構えるために「人類文明五千年の流れ」をセム・ハム、ギリシャ、ローマ、西欧、などブロック別(国別)の勢力拡大・縮小図で眺めた。世界の言語(人種)を樹の幹と枝に擬え、アフリカ、セムハム、インドヨーロッパ、支那・チベット、ウラルアルタイ、オーストロネシア、ネイティブアメリカ別に、関係図を眺めながら学んだ。

(芳野 健二)

Sir Ernest Satow,
A Diplomat in Japan 輪読会
担当幹事 岩崎洋三
Tel 080-7959-4332
iwasakiz1116@gmail.com



■第十四回

六月十七日
開催。Ch. 15
Visit to Kagoshima
and Uwajima
サー・ハリー・パークスから、鹿児島、うわじま、兵庫で現在の政情に関する情報を収集してくるようとの任務を依頼されて、サトウは一八六六年十二月十二日(陰暦十一月六日)に、横浜からプリンセス・ロイヤル号で出航。長崎を経て、鹿児島、宇和島、兵庫で要人に会い、情報交換、情報収集を果たし、一八六七年一月十五日にアーガス号で横浜に帰着した。江戸では政治の動向を掴み難かったからである。

幕府と親しくするフランスとはイギリスは 一步を画しているとの態度が窺われる。イギリスは他の外国より日本人の政治上の容態をよく診断しているとの感がある。イギリスは日本との関係改善を望んでいるが、決して日本の内政に干渉する気はない。イギリスはこの国の元首が誰なのか、真に日本を代表する相手と外交交渉をしたいと望んでいるのだということがみてと

■第十五回

七月十五日開催、Ch. 16
First Visit to Osaka pp. 191-200

サトウは政治情報収集のため一八六六年十二月から翌年一月にかけて長崎・鹿児島・宇和島を各地を訪問してきたが、翌月にはパークスから大阪出張を命じられる。十二月に將軍宣下した慶喜が、外国代表を大阪に招いて会見する予定に備えて、宿泊施設等調査を名目にサトウと上司のミットフォードを二週間の予定で派遣したものだ。

滞在中、もちろん宿泊施設、臨時公使館設営、会見の次第についての事前調査・交渉はこなしたが、政治情報収集・工作が主眼だったことは明白で、薩摩・長州・宇和島はおろか、会津藩の要人と連日酒食をともにしながら会見している。將軍が外国代表を大阪に招く目的は「パークス卿が薩摩と宇和島の大名から招待されたことへの対抗手段」とさえ見られていたほどで、英国と雄藩の交渉は將軍にとって目が離せなかった。驚くのはサトウの奮勇で、外国公使館の館員が名家家臣の招宴に臨むのは前例のない違法行為として幕府役人から咎められたにもおじけず、会津の連中と会うために、提灯

をもった男一人を連れただけで夜間の街にくり出したりしている。戊辰戦争直前の駆け引きはスパイ映画を見ている気分だ。(岩崎 洋三)

第十六回

九月十五日開催、Chapter XVII Reception of Foreign Ministers of the Tycoon

一八六七年四月の中頃、外国の外交代表がそろって大坂へ向かった。フランス公使のロツシュは、自分の打ち出した特殊な政策を推進するために、すでに三月ごろ大坂へ行って、將軍に会い支持を約束していたことは疑いのないところだ。いずれにしても、助言はしていた。あとからわかったことだが、幕府が崩壊したあとは、もはや一日も日本にとどまり得ないと自ら悟るに至ったほど、深入りした言質を幕府にあたえていた。

他方、イギリス側のハリ・パークス卿は將軍を支配者の代理以上のものではないとして、今後はそのように取り扱うように決めていた。それ以後、將軍のことを殿下(ヒズ・ハイネス)と呼ぶことにし、一方イギリスの女帝には、天皇(ミカド)と同格にあることを示す日本語の称号を用いたのである。ハリ・パークス卿は五十名の分遣隊をひきいて、大坂へ向かった。画家のチャールズ・ワーグマンも一行に加えてもらった。日本政府は、明らかに外国代表の歓心を買おうとしていたので、談判もいっせいに迅速に事がはかどった。新將軍慶喜によって、全く新しい一つの方針が打ち出され、友好的な条約をいっせう実際的なものに改善しようとする真剣な努力がうかがわれた。薩摩、阿波、宇和島などの藩士の訪問を受けた。しかし、大体において、將軍の方が反対派に対して勝利をおさめた形であった。將軍が外国諸公使を大坂に招いた主要な目的の一つは、諸公使と親しく会見して、諸外国との間に友好関係を結びたいという希望を表明することにあつた。だが、こうした策を將軍に授けたのか知らないが、外国代表のある一人によって、諸公使館と將軍との間にいっせうの親密性を加えるべきことが提言されたことは、あり得ぬことではないようだ。

西郷やその一派の人々の訪問をうけた。彼らは、われわれと將軍との接近に大いに不満であった。私は、革命の機会がなくなつたわけではないことを、それとなく西郷に言った。しかし、兵庫が一旦開港されるとなると、その時こそ、大名は革命の好機を逸することになるだろう。

このように、維新直前には、薩長派と幕府は英仏も巻き込んで、虚々実々の駆け引きをし、その中で、サトウは薩長をいささか鼻屑にしていった。(小坂田 國雄)

歴史部会報告

担当幹事 小野 博正



mi040031-9697@tba.t-com.ne.jp

岩倉使節団のもたらした成果(光と影)
(報告者: 小野博正)

六月十六日、参加者三十名、二十周年記念シンポジウムに向けて、今後の歴史部会をシンポジウム初日に予定の『岩倉使節団の総括・その光と影』のテーマに絞ることを確認する。まず、私(小野)から、『岩倉使節団の光と影』について概略を報告した。

岩倉使節団が米欧回覧した時期は、世界的にみても第二次グローバル化(第一次は大航海時代)の真只中、国家統一、国民国家の形成過程にあり、欧米も産業革命の全盛であった。同時に帝国主義、植民地主義が跋扈しており、資本主義、民主主義もまだ形成途次の国もあり、様々な発展段階にある十二か国の条約締結国を見た末に、日本の国のかたちは、性急に定めず、漸進的に富国強兵の道を進めることにした。

そのモデルとして選んだのが、統一直後でありながら、普仏戦争に勝利し、着実に立憲君主国として富国強兵に成功しつつあったドイツであった。ドイツの皇帝に対し、天皇を位置付ける近似性も親和的であった。こうして、丸ごと西洋文明を摂取すること、よくも悪しくも日本の近代化であり、脱亜入欧して、アジアで初の西洋化が実現した。この過程では、国内的には開発独裁的要素や、自由民権運動の抑圧、対外的には近代化に追従しないアジア諸国への蔑視に繋がったことなどへの検証が必要との指摘を行った。

続いて、もう一つの報告が行われた。
■使節団伊藤博文による工部大学校設立―明治日本の産業近代化を支えた工学の導入(報告者: 田辺康雄)

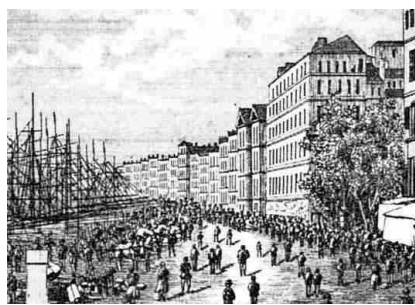
わが国のエンジニア教育の始まりは、伊藤博文と山尾庸三の建議により一八七一年に工部省内に工学者がつくられたのが嚆矢である。使節団の副使伊藤博文は英国滞在中、その教師を雇うため、一等書記官の田辺太一らとグラスゴー大学のランキン教授を訪ね依頼した結果、ヘンリー・ダイアー(当時二十五歳)をはじめとする新進気鋭の学究

を紹介され、最終的には各科目別に二十名に及ぶ教師を招聘することになる。その中には、エアトン、ダイヴァース、コンドルなどもいた。

明治十年には工部大学校と改称されて、初代校長には大鳥圭介が就任、教頭にはヘンリー・ダイアーがなり、土木、器械、電信、建築、鋳山、化学、冶金の七科が設けられて、技術国家日本のエンジニア養成に多大の貢献をすることになる。ここからは辰野金吾、高峰譲吉、田辺朔郎など多数の人材が育つていく。後にこれが東京帝国大学工学部になる。(小野 博正)

■明治国家形成期における井上毅の事績―福澤諭吉の時代から井上毅の時代へ(報告者: 大久保啓次郎)

七月に十一日開催。井上毅は「明治国家のグラウンドデザイナー」と呼ばれている。「明治国家形成期における井上毅の事績」として「憲法制定」と「教育方針の策定」だけを取り上げたが、井上はその他にも条約改正の問題、台湾や朝鮮との外交問題、軍人勅諭・皇室典範・日清戦争開戦の詔勅の起草、議会運営への関与、等々明治国家形成のあらゆる分野で貢献している。しかも、これらの事績は「明治十四年の政変」以降の



マルセイユ港の風景 (『実記』)

事であり、係る観点からも、「明治十四年の政変」で陰の主役として井上毅が果たした役割は甚大であったと言わざるを得ない。『「明治十四年の政変」は「第二の明治維新」だ!』と言う人もいる。確かに、明治維新以来、国家及び国民が、進むべき道標を設定し、歩んで来た道が、「明治十四年の政変」で大きく方向転換させられたのである。立憲政体はプロシア型に決まり天皇の権限が温存され、これまで「文明開化」の旗印の下に、西洋文明思想が国民の中に浸透しつつあったのが、儒教思想に基づく教育方針の変更に、政府及び国民が目指す方向が変わったのである。

（井上毅関与の）「教育勅語」は、第二次世界大戦終了時点（昭和二十年）まで国民教育の礎として長期間（明治・大正・昭和）存続したのである。極端な言い方をすれば、福澤諭吉の国家及び国民への影響力は、「明治十四年の政変」の時点で終わったのである。そして再び福澤諭吉が見直されるのは、昭和二十年以降となる。そういう観点から捉えると、「明治十四年の政変」は、当時の日本の進路を決定した重大な事件であった。（大久保啓次郎）

■近代医学への道と長与専齋 (報告者:西井易穂)

九月十四日開催。(十月八日開催の関西支部例会でも同様に報告された)

日本の医学は江戸中期から明治へかけて西洋医学を取り上げる方向で近代医学への道を歩いた。江戸中期は蘭学者から西洋医学の情報を受け解剖学を中心として目覚ましい進歩を遂げた。その代表的存在が杉田玄白と言えらるだろう。漢方医学の指導者たちから、色々な迫害やら、抵抗が厳しく、遅々として進展できなかった。近代医学発展に貢献した異国人にはチュンベルグ、シーボルト、ポンペ、ボードウィン、ゲーリッツなど多数いたので紹介した。長

与はポンペの教えを受けている。日本人十三名の医学関係の人物像を纏めてみた。日本の近代医学は杉田玄白による解体新書刊行から百年経過し、長与専齋による医制七十六条制定により確立されたと評価できる。この経過中に多くの本草学者が強い影響を与えているが、中でも華岡青洲の存在は無視することが出来ない。

日本の近代医学の興隆は上方での滝塾を主宰した緒方洪庵グループと佐倉順天堂の佐藤泰然一門による二派に大きく分類されると考えられる。洪庵自身は純粋な医師業を遂行していたが、蘭学と世界動

勢に目覚めた弟子には政治家への道を進む秀才が多く出た。これに対して泰然一門の多くは純粋な医師としての道を歩んだと思われる。それに息子たち林洞海、松本良純、佐藤尚中、佐藤進らが継続して現れたことが大きく影響したと判断される。

明治になり、洪庵の弟子、長与専齋が、岩倉使節団米欧視察の旅を終え帰国した翌年、医制七十六条を制定し、薬局方が編纂され、漢方医否定のみちを辿って行った。衛生行政の中枢に座り、衛生行政が軌道に乗り始めた。

長与専齋は米国視察を途中で切り上げ、ヨーロッパに渡

り、ここで西洋医学の進歩を目の当たりにした。そこで、公衆衛生の重要性を認識すると同時に、ヨーロッパでの医療行政の実態を勉強した。そのとき、すでにイギリスほかヨーロッパに留学していた若き日本人たちとの交流を持ち、パリのホテルで会合して、日本の医療行政について議論する機会があった。池田謙齋、桂太郎、松本銈太郎、長井長義らが同席して、医制七十六条の基本的構想を練っている。帰国後の翌年、明治七年にはすばやく医制七十六条を交付することが出来た。

長井長義は化学者として長与専齋に大変な影響を及ぼした。第一回大学東校派遣留学生として岩倉使節団が米欧に出かけた同じ航路、同じ船でドイツに留学して、ドイツ流医学情報を伝えている。薬局方制定へのコメントもしたと考えられる。長与の提案で、ゲーリッツ指導のもとに日本最初の薬局方が制定された。

ポンペの教えを受けた日本写真術の開祖上野彦馬は舎蜜必携という日本初の化学書を発刊しているが、長井長義は長崎で彼の家に寄宿して化学の知識を得ている。

当時、政府でドイツ医学かイギリス流医学にするかの激しい議論がなされたが、相良知安提案のドイツ流医学に落

ち着いた。実際に医療現場で実施したのが順天堂の佐藤進で、その順天堂医院手術傍観録を私の祖父西井格太郎が執筆したものが残っていて、私はその原本を発見して百五回日本医史学会で報告した。（西井易穂）

■金子堅太郎―「広報外交」の先頭に立ち日本の転機を身をもって知る (報告者:吹田尚一)

九月二十八日、参加者十八名。

金子堅太郎は岩倉使節団同行留学生として、旧藩主・黒田長知の随員として旧琢磨と共に渡米留学し、在米八年間で、ハーバード大学法律学校を卒業し帰国する。その後五度の海外視察で、欧米列強の各界の指導者との接触によって得た、彼らの本音を知悉しており、とりわけ、ハーバード大学OBの米國セオドア・ルーズベルト大統領との交流は、日露戦争勃発の際に、日本の立ち場を説明する広報外交にいかんなく発揮された。

金子は、米国において、①ユニバーシティ・クラブ②ハーバード大学③「黄禍論」への反論(北米評論)④地学協会⑤カーネギーホールなど五つの主要なプレゼンテーションの機会を捉えて、正統的に議論を展開し、日本国家

の成り立ち、その特性は文化融合にあり、模倣から創造性に高めていること、西洋文明撰取の上で今の日本があること、日本文明は正理を遵法する原則を保持していることと主張。黄禍論には、人種優越論、キリスト教優越論の上に、既得国益侵害懸念が伏在していることを述べて反論している。

然し、日露戦争の始まりは、日本を西洋文明の優等な教え子のように思い、その生徒が、専制的欺瞞のロシアに立ち向かう姿に見て理解のあった欧米も、日本が勝利をおさめて日本の興隆がはつきりすると次第に警戒心を強めた。ロシアのウイツテ伯がポーツマス交渉内容を、日本が過大な要求をしていると故意に漏洩し、小村全権がマスコミに適切に対応せず、交渉内容を口外しない約束と紳士振りを貫いた頃より、金子の努力で八十%の米国人が日本びいきであった空気が微妙に変化し始めた。「文明の門」に入ることは、力を必要とし、力を得ると文明列強諸国と争い合う世界に入ることでもあった。

文明の門に入った日本は世界に歓迎される国になっているのかを、今一度考えさせられる機会ともなった。

(文責) 小野 博正

グローバルジャパン研究会報告

担当幹事 島山 朔男



hatakeyama@joy-hi-ho.ne.jp

■遅しい若者を作るために
(報告者：大平忠)

六月十六日開
催。
太平洋戦争敗戦直後、永野護はこの敗戦の原
因は、「明治以後の教育が、人間の鍛錬を忘
れ、知識技術に
偏り、大人物が不在だった」
ことにあると説いた。原発震
災については、黒川国会事故
調査委員は、「この事故は人
災であり、人としての責任感
を欠いた」がためであったと
結論した。

責任感を持った遅しい人間をどうやって作るのか。

一・幼少期のしつけと教育

一方で、規範の刷り込みが必要であり、(中国・論語、ユダヤ・モーゼの律法、日本・仕の教え・・・ならぬこととはならぬ) 他方で、対話が必要である。(何故という問いかけをさせ、自分で考え自分で判断し、発表する。ユダヤ・よい教師は生徒からよい質問を引き出す)

【問題点】
英米独韓に比べ、日本の母親は子どもを甘やかし、しつけていない。(中国の孟子もユダヤの賢人ベンシラも、母

親がしつけなければ子どもは禽獣と同じであり将来泣かされると説いた)

二・青少年の教育

心身のスパルタ教育が必要である。(薩摩・郷中教育、読書と議論、武術)(長州・松下村塾、何故かとマンツーマンの議論)(イギリス・パブリックスクール、精神と肉体の鍛錬、ノブレス・オブリージュ、団体スポーツ)

ようやく日本でも、覚える学習から考える学習への転換が始まっている。

三・心に灯をつける教師の必要性

薩摩・下加治屋町の郷中：西郷兄弟、大久保、東郷、長州・松下村塾・・・久坂、高杉、伊藤、山県、札幌農学校・・・新渡戸稲造、内村鑑三

四・沈黙しない勇氣

空気に流されずノーと言え
る勇氣、いざという場において、自分の考えたことを行動できる勇氣を持った人間、即ち責任感のある人間に、若者たちはなつて欲しい。

【最後に】
〇〇十四才までの人口は、二〇五〇年には三分の二以下になる。日本の将来は、数少ない若者一人一人が遅しく育つかどうかにかかっているのである。

(大平 忠)

関西支部報告

担当幹事 難波 康熙



namba@jttk.zaq.ne.jp

■第八十三回
七月八日開
催、参加四名。
第三卷巴里府の
記

一行は、フランス新政府に対して新年を祝賀するために、ヴェルサイユ宮殿に赴く。この宮殿での儀式は、この後に両

国で激しく戦われた二度にわたる世界大戦の序曲に過ぎなかった。最終的には対立を解消したEUとそれを支える単一通貨ユーロを生むまでの、一世紀半の過酷な歴史の始まりでもあった。

例会の後半は、ギリシャの債務問題が注目されるなか、謂わば生殺与奪権を握るEUとユーロ圏の覇者である「ドイツ」の存在とその力の実態に焦点を当てて話し合った。問題の端緒を掴む材料として、フランスの著名な歴史、人口学者であるエマニュエル・トッド氏のコメント集「『ドイツ帝国』が世界を破壊させる」(文春新書)を用いた。

【第八十四回】
九月二日開催、参加五名。
第三卷巴里府の記
まず、八月に富士山麓の山中湖で実施された米欧亜回覧

(難波 康熙)

の合宿に、大阪から独り参加した筆者が、来年秋に回覧の会の二十周年記念として東京で開催予定のシンポジウムの計画の内容、その経緯について説明した。

パリに居座りじつくりと欧州の先進国社会、特に「君主主導型の大衆社会変革」を観察している。プロシヤ(独逸)でも、ビスマルク主導で上からの大衆労働者の福祉政策が行われている。

欧州の先進国では、植民地からの収奪による帝国主義競争が行われたと言われているが、一方では、労働福祉政策などで大衆の力を引き出し、所謂国民力を統合し引き上げることでも国力を増すという、欧州での「『国民国家』の構築競争の時代」でもあったと考える。実際、ナポレオン三世は、今日の我々には敗戦で追放された皇帝のイメージが強いが、インドシナの植民地化政策を進める一方で、フランス国内の大衆の力を結集して、国民力ひいては国力を大いに高めたのも事実である。

使節団は、つぶさに欧州各国を観察することで、君主制の下での強い「国民国家」を創り上げること決心したものと考えられる。何も、プロシヤ型国家モデルだけを模倣したのではない。

(難波 康熙)

特定非営利活動法人
「米欧亜回覧の会」ご案内

- 趣旨** この会は「岩倉使節団」に興味をもち、その記録である「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。
この歴史的な大いなる旅と「実記」は、まさに「温故知新」の宝庫といえましょう。
この素材を媒体に歴史を学び、現代の直面する諸問題についても自由に語り合う会です。
- 会員** 趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。
- 例会** 年に4回、全体例会があります。
- 部会** テーマ別に読む会、歴史部会、グローバルジャパン研究会等があり、映像サロン・旅行会・研究会・シンポジウムなどを行っています。
- 機関紙** 年に4回、機関紙を発行し活動報告や会員の意見発表、情報交換の媒体とします。
- 役員** 理事長(泉三郎)他理事および監事で構成、会員の中から幹事十数名を選び、運営を担当します。
- 会費** 年会費6,000円とし、主として通信費及び機関紙代に充当します。例会・部会・講演会などについては、その都度の会費とします。なお、遠隔地居住者、仮入会希望者、学生には地方会員、準会員、学生会員の制度もあります。
- 事務局** 「米欧亜回覧の会」事務局担当 古俣美樹
〒190-0001
東京都立川市若葉町 1-24-30-7111
E-mail:info@iwakura-mission.gr.jp
TEL/FAX 042-534-9295

入会申込

入会申込書はホームページと事務局にあります。新規入会に際しては入会金5,000円を頂きます。
なお年会費などのお支払いは下記のゆうちょ銀行口座への払込(振込)をご利用ください。

00180-2-580729 特定非営利活動法人米欧亜回覧の会

ホームページ

メッセージ・活動と内容・岩倉使節団・米欧回覧実記・会員のページ 等
また、書籍・DVD案内もあります

<http://www.iwakura-mission.jp>

*お知らせ欄も時々チェックしてください



<催し案内>

2015年 11月～12月の予定です

☆11月全体例会

日時: 11月15日(日) 13:30～16:45 (開場13時15分)
例会: 会務報告(第一部) 13:30～14:15
講演: 保阪正康氏
「現代的課題を大正時代の歴史から考える
～平和・デモクラシー・生活を中心に」
14:30～16:30 (17:00から懇親会を予定)
場所: 学術総合センター会議室(千代田区一ツ橋)
会費: 2,000円(懇親会5,000円)

☆実記を読む会

日程: 11月12日(木) 小野氏「第99巻」
12月10日(木) 泉氏「第100巻」、忘年会
時間: 14:00～ (12月10日は12:00～)
場所: 国際文化会館401号室(会費: 1,000円)

☆Sir Ernest Satow, A Diplomat in Japan 輪読会

日程: 11月18日(水) 14:00～ Ch. 19
12月16日(水) 14:00～ Ch. 20
1月20日(水) 14:00～ Ch. 21
場所: 日比谷図書文化館セミナールーム
会費: 1,000円

☆歴史部会

日程: 11月16日(月) 13:30～16:30
「明治の文部行政と田中不二麿」
(大森東亜氏)
12月14日(月) 13:30～16:30
「岩倉使節団と新島襄」(多田直彦氏)
場所: 国際文化会館404号室(会費: 1,000円)

☆近代史研究会

日程: 11月25日(水) 13:30～16:30
「柳宗悦」(小松優香氏)
12月4日(金) 13:30～16:30
「小林一三」(難波康熙氏)
場所: 国際文化会館404号室(会費: 1,000円)
*詳しくは事務局・古俣まで

☆グローバルジャパン研究会

日程: 11月29日(日) 13:30～16:30
テーマ: 「幸福とは、福祉社会とは?」(泉三郎氏)
場所: 国際文化会館401号室(会費: 1,000円)

編集後記

◇二頁分を増頁して十頁のニュースとなりました。理由の一つは、目を通して頂ければ分かると思いますが、二十年記念事業の大枠が決まり、三つのプレセミナーが動き始めたことがあります。準備段階ということもあって、それぞれ頻度高く会合が持たれています。

◇その中で、小野幹事の群像小伝で先行していた人物論のセミナーAは、歴史部会に引き継がれ、月二回のペースとなった上に、力の入った部会報告が多くなりました。そして、セミナーBは「近代史研究会」で、また、セミナーCはグローバルジャパン研究会で研究や基本テーマの検討が進行しています。プレセミナーについての整理と概要は、三～五頁をご覧ください。

◇これらのプロジェクト型の基礎にある、実記を読む会、サトウ輪読会や関西支部の活動も充実し、さらに、使節団や『実記』を音楽や映像を通して紹介する、i-cafeが常に開催されています。

◇当会活動の幅の拡大と奥深さによって、発信力が高まっていることは間違いない。今号では五人の方の新会員自己紹介を掲載することができました。